

日本英文学会関東支部 第 23 回（2023 年度秋季大会） プログラム

日時： 2023 年 10 月 29 日（日）
会場・開催校：実践女子大学 渋谷キャンパス
〒150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49

アクセス方法

渋谷駅からお越しの場合

JR 線・東京メトロ(銀座線・半蔵門線・副都心線)・東急(東横線・田園都市線)・京王井の頭線
東口 C1 出口から徒歩約 10 分

表参道駅からお越しの場合

東京メトロ(銀座線・半蔵門線・千代田線)
B1 出口から徒歩約 12 分

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル
Tel/Fax 03-5261-1922
E-mail: kanto@elsj.org

12:00	開場・受付開始 (受付：1 階、控室：6 階 602 教室/608 教室、書店展示：1 階)			
12:30 12:50	総会 6 階 604 教室			
	第 1 室 6 階 603 教室	第 2 室 6 階 604 教室	第 3 室 6 階 607 教室	第 4 室 6 階 608 教室
研究発表 1 13:00 13:40	「わたし」という 亡霊：マグナス・ ミルズ作品の一人 称の語り手につい て (発表者) 戸丸 優作 (司会者) 田尻 芳樹	『ソーン医師』、 『ミドルマーチ』 に見る脇役から主 役へと変化する医 者たち (発表者) 矢野 奈々 (司会者) 谷本 佳子	退屈からの逃避？ ——地下と気儘と アリス (発表者) 高田 英和 (司会者) 芦田川 祐子	Shirley Jackson の <i>The Haunting of Hill House</i> と <i>We Have Always Lived in a Castle</i> にみるケアの表象 (発表者) 加藤 安沙子 (司会者) 杉山 直子
研究発表 2 13:50 14:30	第二次世界大戦期 の小説・ラジオ作 品における幽霊— —ジェイムズ・ハ ンリーとエリザベ ス・ボウエンの比 較考察 (発表者) 永嶋 友 (司会者) 長島 佐恵子	ことばを省いた演 劇：キャリル・チ ャーチルとフィジ カル・シアター (発表者) 金田 迪子 (司会者) 堀 祐子	「でも世界へ出て 行きたいのだから、 ああ、君には若さ がある」——『人 間の絆』と金融資 本主義の後期ビル ドゥングスロマン (発表者) 大澤 舞 (司会者) 高畑 悠介	開催なし（控室）

部門別 シンポジウム 14:40 16:40	【シンポジウム 1】 イギリス文学部門 6 階 602 教室 文学研究とデジタル・ ヒューマニティーズ (司会・講師) 橋本健広 (講師) 宮川創 (講師) 船田佐央子 (講師) 永崎研宣	【シンポジウム 2】 アメリカ文学部門 6 階 603 教室 アメリカ演劇における 兄弟姉妹 (講師) 大森裕二 (講師) 月城典子 (司会・講師) 佐藤里野 (講師) 黒田絵美子	【シンポジウム 3】 英語学・英語教育部門 6 階 604 教室 英語リスニングの 理論と実践 (司会・講師) 柳川浩三 (講師) 濱田陽 (講師) 米山明日香
--	--	--	--

開場・受付開始（12:00 より 1 階にて）

13:00-13:40 【研究発表 1】

第 1 室（6 階 603 教室）

（発表者）江戸川大学助教 戸丸優作
（司会者）東京大学教授 田尻芳樹

「わたし」という亡霊：マグナス・ミルズ作品の一人称の語り手について

本発表はイギリスの作家マグナス・ミルズ (Magnus Mills, 1954-) の小説に見られる一人称の語り手の様態を分析するものである。デビュー作 *The Restraint of Beasts* (1998) [邦訳『フェンス』(2000)] 以来、*Explorers of the New Century* (2005) [未邦訳] が三人称で語られているという例外はあるものの、一人称の語り手は登場人物として物語内に存在しながらも他の登場人物から名前を呼ばれることはなく、作中でその名前は明かされない。同時に、*The Field of the Cloth of Gold* (2015) に見られるように、語り手は一人称の語り手でありながら物語内に遍在する存在として描かれている。こうした語り手の遍在性を踏まえ、デリダのマルクス論に登場する憑在論 (hauntology) を参照しながら、語り手の亡霊的な存在様態を析出する。その上で、*The Restraint of Beasts* と *All Quiet on the Orient Express* (1999) における時間性に着目し、語り手が通常想定されるものとは異なる時間に巻き込まれていることを分析する。以上の作業を通じて、ミルズ作品における一人称の語り手が持つ独自性を浮き彫りにしたいと考えている。

第 2 室（6 階 604 教室）

（発表者）北里大学専任講師 矢野奈々
（司会）東京農業大学准教授 谷本佳子

『ソーン医師』、『ミドルマーチ』に見る脇役から主役へと変化する医者たち

19 世紀のイギリスは医学的飛躍が目覚ましく、それに伴い医者と患者の関係も大きく変化した。そして、19 世紀半ばの小説において医者が脇役から主役が変わって描かれるようになる。医者が主役となる代表的な小説にアントニー・トロロープ (Anthony Trollope, 1815-1882) の『ソーン医師』(*Doctor Thorne*, 1858) とジョージ・エリオット (George Eliot, 1819-1880) の『ミドルマーチ』(*Middlemarch*, 1871-72) が挙げられる。『ソーン医師』の主人公ソーン医師、『ミドルマーチ』の主人公リドゲイトは共に田舎の開業医であるが、それぞれのコミュニティ内での二人の立場や評価、人間関係には違いがある。本発表では、脇役から主役へと変化する二人の医者の描写を通し、医者の役割がどのように変わったのかを考察し、さらに作家たちは医者をつどのような存在として捉えていたのかを検証する。

第3室（6階607教室）

（発表者）福島大学教授 高田英和
（司会）文教大学教授 芦田川祐子

退屈からの逃避？——地下と気儘とアリス

アリスは地下（アンダーグラウンド）に潜る。この点が Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* においては重要である。文字だけで挿絵の無い「本」を見て、退屈をあらわにするアリスは、何故に、地上から地下へと向かうのだろうか。本発表では、アリスの地上から地下への移動、その意義を探ってみることにする。そして、その際のキーワードは「気まま」と「成長・成熟」になる。好き勝手に活動し行動する少女のアリスは、どうして「気まま」に振る舞うことが可能であり、と同時に、アリスは身体的に精神的にどのように「成長・成熟」する（あるいは「成長・成熟」しない）のだろうか。この点を、本発表は、考察する。その時のポイントは、アリスが、姉の読んでいる「本」に何処か違和感を感じている、という点である。この点を補助線として、アリスの行動・活動・振る舞い、その要因と意味を探り示してみたい。

第4室（6階608教室）

（発表者）東京大学大学院博士後期課程 加藤安沙子
（司会）日本女子大学教授 杉山直子

Shirley Jackson の *The Haunting of Hill House* と *We Have Always Lived in a Castle* にみるケアの表象

本発表では、Shirley Jackson の *We Have Always Lived in a Castle* と *The Haunting of Hill House* を比較・検討し、ゴシック小説のパロディの形式をとった二作品でケア労働に従事する女性がどのように表象されているか考察する。

まずは両小説における「物」や「建物」の扱いを確認し、屋敷に残された家族や前の家主の遺物、そして擬人化される屋敷が、ナラティブを内包した存在として滞在する者に家族の歴史を意識させ、彼女たちをケア労働へと誘導する装置として作用することを論じる。次に、性格や生き方が対称的な女性の登場人物（本発表では「対称人物」と名称する）の存在について検討し、彼女らはゴシック小説の定石と異なり攻撃性を持たないが、自身のケアを主人公の女性に担当させることでケア労働から解放された存在への憧憬を抱かせ、破滅的な結末へと向かわせる役割を担うことを明らかにする。

13:50-14:30 【研究発表 2】

第 1 室 (6 階 603 教室)

(発表者) 慶應義塾大学専任講師 永嶋友
(司会) 中央大学教授 長島佐恵子

第二次世界大戦期の小説・ラジオ作品における幽霊
——ジェイムズ・ハンリーとエリザベス・ボウエンの比較考察

本発表は BBC Written Archives Centre 所蔵の放送原稿や書簡や制作ファイルをもとに、ジェイムズ・ハンリーとエリザベス・ボウエンという珍しいペアの第二次大戦期の小説 (Hanley *The Ocean* (1941)、Bowen *The Heat of the Day* (1948) など) やラジオ劇・フィーチャー (Hanley “Open Boat” (1941)、Bowen “Anthony Trollope” (1945) など) に描かれる幽霊および霊的なものを、ラジオ、検閲、プロパガンダといった新たな視点から比較考察を行なう。両作家の幽霊・霊的なものの描き方やそれらが描かれている作品に対する BBC の反応は対照的である。BBC が大戦時に一時的にだとしても、対照的なハンリーとボウエンを起用していたことは注目に値する。それは、大戦時の BBC が検閲やプロパガンダに揺すられながらも、幅広い文化を取り入れていたことを表わすからである。

第 2 室 (6 階 604 教室)

(発表者) 実践女子大学助教 金田迪子
(司会) 慶應大学専任講師 堀祐子

ことばを省いた演劇：キャリル・チャーチルとフィジカル・シアター

キャリル・チャーチル (Caryl Churchill (1938-)) は 1980 年代末に受けたインタビューの中で “I have found the theatre a bit boring for a while” と答え、その当時の自身の作劇における関心が “doing things without words” だったと述べている。これらの発言は、90 年代前後のチャーチルの実験的な傾向の強まりと、同時代のフィジカル・シアターの台頭との連動を検討する手掛かりとなる。

本報告では、90 年代前後のイギリスのポリティカル・シアターの美学的な実験への転向と脱政治化の問題、同時代のイギリスの文化政策の展開の 2 つの観点から、ダンス作品 *Fugue* (1988) や *The Skriker* (1994) 等における身体性の追究と言語の否定の様相を分析する。演劇における言語の特権性を否定するポストドラマティック演劇の概念の台頭といった同時代の舞台芸術をめぐる言説も参照しつつ、一見脱政治化への迎合とも思えるようなチャーチルの身体性の追究と言語の否定が、文化のポリティクスに対する美学的な葛藤として読まれうることを明らかにする。

第3室（6階607教室）

（発表者）明治大学専任講師 大澤舞
（司会）埼玉大学准教授 高畑悠介

「でも世界へ出て行きたいのだから、ああ、君には若さがある」 ——『人間の絆』と金融資本主義の後期ビルドゥングスロマン

サマセット・モーム『人間の絆』(*Of Human Bondage*, 1915)の後半、「名も知れぬ医学生」にすぎない主人公フィリップ・ケアリーの「命運」は、「彼の国がたどっていた重大な出来事」に左右される。その出来事とは、南アフリカ戦争(1899-1902)におけるイギリスの苦戦と、彼が投資した南アフリカ金鉱株の暴落である。本発表は、『人間の絆』を19世紀の古典的ビルドゥングスロマンからモダニスト・ビルドゥングスロマンへの移行期にある小説とみなし、イギリスと南アフリカを結ぶ金融ネットワークが、「名も知れぬ医学生の人生」と国の「歴史」の「形成過程」とを交錯させる歴史性に注目する。結局フィリップは伯父の遺産の助けで医者になり結婚を決意するものの、『人間の絆』は、古典的成長物語が描く「成熟」やモダニズム期の「時機を逸した若さ(unseasonable youth)」(Jed Esty)とは些か異なる「若さ」、すなわち「世界へ出て行く」可能性を主人公が内面化した「若さ」の形象によって、モダニズムの始まりと「帝国の時代」におけるビルドゥングスロマンの困難さを刻印している。

【部門別シンポジウム】 14:40-16:40

<シンポジウム 1：イギリス文学部門> 6 階 602 教室

(司会・講師) 中央大学教授 橋本健広
(講師) 国立国語研究所助教 宮川 創
(講師) 福岡大学講師 船田佐央子
(講師) 人文情報学研究所主席研究員 永崎研宣

文学研究と DH

文学研究は、初期のころからいわゆる科学的な研究方法を模索してきたといえます。現在では、コンピューターの普及とデジタル・リテラシーの向上、そしてデジタル・アーカイブの拡充によって、多くの文学研究者が科学技術の恩恵を受けた研究を行っています。

1980 年代以降盛んになった、文学テキストや絵画等の各種資料をデジタル化し、コンピュータ上で閲覧、検索、分析を可能とする DH (デジタル・ヒューマニティーズ) は、人文学研究に新しい視点をもたらしました。その一方、DH には、固有の情報学的な理論・方法が多いため、従来の文学研究に取り入れることはなかなか難しいかと思います。文学研究者は DH をどのように利用するべきでしょうか。

本シンポジウムでは、文学研究者が DH を利用するための、精読と遠読の接続について考えます。

イギリス文学における精読と遠読：DH 研究の方法論

橋本健広

イギリス文学の文学研究においては、その始まりから、精読が一つの方法論的基礎をなした。一方で、文学研究には時代の風潮や人々の心理的傾向を探る研究も多くみられた。その方向性の違いは、テキストの細かな部分に着目するか、全般的な傾向を俯瞰するかの違いにあったといえる。同時にまた、分析における主観と客観の程度の違いであったともいえる。DH のテキスト分析研究 (computational literary study) が発展しつつある現在、同分野を文学研究にどのように取り入れていくことができるだろうか。本発表では、精読の批評の歴史、文学における DH 研究、イギリス・ロマン派における DH 研究を概観したうえで、影響研究における数量的分析に着目し、ワーズワスの『辺境者たち』とコールリッジの『オソーリオ』の影響の分析例をもとに、どのようなかたちで数量分析を踏まえた精読が行えるか、その可能性を探りたい。

古代末期キリスト教文学における
間テキスト性へのデジタル・ヒューマニティーズ的アプローチ

宮川 創

本発表は、発表者がゲッティンゲン大学に提出した博士論文 *Shenoute, Besa, and the Bible: Digital Text Reuse Analysis of Selected Monastic Writings from Egypt* の一部に基づく。本研究は、古代末期エジプトのキリスト教著述家、シェヌーテとベーサの著作における聖書との間テクス

ト性を分析する。TEI XML で制作した諸写本のデジタル学術編集版に、形態論・統語論・意味論的タグを付したデジタル・コーパスを構築した上で、テキスト・リユース探知技術を活用し、コプト語の修道院文学における聖書の間テキスト性研究の計算言語学的手法の可能性と制約を探究する。著述家たちが聴衆の聖書の集団的記憶を利用し、聖書の節句や概念を自己の修道的理念と結びつける様子を確認する。そして、これらのデジタル化プロジェクトがデジタル間テキスト性研究の範囲を拡大し、新たな研究課題と発見への道を開く可能性を示す。

ディケンズの言語・文体研究——「アナログ」と「デジタル」の観点から

船田佐央子

文学作品において、作家が用いる言語的特徴を見出すためには、テキストの精緻かつ丹念な読解と文脈に沿った用例の正確かつ効率的な抽出が求められる。文体論研究を行うにあたり、これまでには作家独自の用いる表現を手作業で探り、抽出したものをノートやカードに書き出すアナログ的手法が実践されてきたが、現代においては DH（デジタル・ヒューマニティーズ）という学問分野の確立に伴い、コンコーダンスや電子テキストなどのデジタル・リソースを媒介とした文体研究も精力的に行われるようになった。

本発表では、ディケンズの修辞法における言語的特徴を明確にするために、「アナログ」と「デジタル」の両側面をバランスよく合わせた研究手法を適用させることの意義と有効性を文体論研究の立場から議論する。その具体的な事例として、『デイヴィッド・コパーフィールド』と『大いなる遺産』を題材に、一人称の語り手によって人物描写されるメタファーについて、作品の精読、およびオンライン上の言語データベースを介しての分析を提示する。さらに、DH の観点から、ディケンズの言語・文体研究の今後の展望と可能性についても検証する。

人文学におけるデジタル研究環境のグローバル化と英文学研究への期待

永崎研宣

紙媒体に多くを依拠してきた人文学研究は、明示的にも暗黙的にもその特性に制約されつつも活かしながら発展してきた。近年は、デジタル媒体の普及が進む中で、一部には DH という文脈でデジタル媒体の特性を活かした研究が進められつつあるものの、大勢としてはそれを紙媒体での文脈に置き換えながら研究を展開することが多いように思われる。そして、前者についても、新たな研究手法の開発が盛んに進められる一方で、あくまでも紙媒体での既存の研究手法を深化させるべく支援する研究も着々と進められている。とはいえ、いずれにおいてもデジタル媒体を利用する以上、デジタル媒体の特性に起因する何らかの制約を暗黙的・明示的に受けることは避けられない。

本発表では、SAT 大蔵経テキストデータベース研究会による大規模仏典テキストデータベース構築プロジェクトにおける精読・遠読のための研究環境構築に関わる経験を踏まえ、東アジアのテキスト研究において生じたデジタル媒体上の制約と解決への道筋、そして、それを踏まえた日本における英文学研究への期待をお伝えしたい。

<シンポジウム 2：アメリカ文学部門> 6 階 603 教室

(講師) 拓殖大学教授 大森裕二
(講師) 白百合女子大学講師 月城典子
(司会・講師) 東洋大学准教授 佐藤里野
(講師) 中央大学教授 黒田絵美子

アメリカ演劇における兄弟姉妹

アメリカ演劇には兄弟姉妹を描く作品が数多く存在する。オニールの『地平の彼方』やシェパードの『本物の西部』に顕著のように、多くの場合、兄弟姉妹は対照的／相補的に描かれ、何らかの対立葛藤の状況下にある――男兄弟の場合、その関係性がカインとアベルの状況を連想させることは言うまでもない。この典型例として、ミラーが翻案したイプセンの『民衆の敵』が挙げられる。保守的な現実主義者の兄ピーター・ストックマンが市長として権力を握る一方、科学者の弟トーマスは市の温泉施設の水質汚染の問題を巡って兄と対立し、「民衆の敵」として「反体制」の立場に置かれる。兄と対立する弟は、多くの場合、反体制的、理想主義的、あるいは遊動的である。無論、この基本的類型とは兄弟の立場が逆転した状況を描く作品は、それ故に別の意味内容を帯びることになる。

以上を共通の了解事項として、本シンポジウムでは、アメリカ演劇が描く兄弟姉妹の諸相を検討する。

オニール演劇とカイン・コンプレックス

大森裕二

家族劇『夜への長い旅路』が描く一連の不幸な出来事の発端には、幼少期のジェイミーが両親の不在中に、麻疹を患っているにもかかわらず、弟ユージーンの部屋に入り、麻疹をうつして死なせてしまった事実が存在する。母メアリーの辛辣な言葉が伝えるように、ジェイミーの行為には母親の愛情をめぐる幼い弟への嫉妬心が見え隠れする。また、『地平の彼方』では、メイオー兄弟の幼馴染のルースが兄アンドリューではなく、弟のロバートを結婚相手に選んだために、アンドリューが家業の農場経営を放棄することで一家の没落のドラマが始まる。さらに、『喪服の似合うエレクトラ』で描かれるマノン家の悲劇は、マリー・ブラントームをめぐる兄エイブ・マノンと弟デイヴィッドの恋の鞘当ての結果、マリーを勝ち取ったデイヴィッドが一族から追放された一件から始まる。本発表では、共通の女性をめぐる兄弟同士の対立の構図を共有する上記三作を、カイン・コンプレックスの観点から検討する。

シェパード劇におけるきょうだい関係と親子問題との相関性

月城典子

ピューリッツァー賞受賞作『埋められた子供』をはじめ多くの家族劇を書いたサム・シェパードには、兄弟姉妹の登場する作品が多い。その多くは、父親との葛藤を描いたものであるため、きょう

だいたちは同じ敵に対峙する者同士の関係にあると同時に、ライバル関係にもある。父親に対する反発や抵抗の感情と、きょうだい関係との間には、なんらかの相関関係が認められる。

本発表は、彼の家族劇5部作を中心に映画作品も視野に入れて、自堕落な兄と優等生的な弟、崩壊して行く家庭に執着する兄と出て行く妹、近親相姦の間柄にある腹違いの兄と妹など、多様な兄弟姉妹の関係の根底には機能不全の親――暴力や飲酒、家庭の放棄などの問題を抱えた親――との軋轢があり、それらが、きょうだい同士が社会的地位や財産、家族の中での位置を争うことにつながっていくことを検証する。

家族劇にもたらされる奴隷制の遺産

佐藤里野

親の遺産をめぐる黒人の兄弟姉妹が対立するというテーマは、オーガスト・ウィルソンの『ピアノ・レッスン』(1987) やスーザン＝ロリ・パークスの『トップドッグ／アンダードッグ』(2001) など、アフリカ系アメリカ演劇を代表する劇作家の作品の中で取り上げられてきた。これらの作品における遺産には、親から子に遺される金品や財産だけではなく、世代を経てなお家族の構築に影響を及ぼし続ける奴隷制のトラウマという負の遺産も含まれている。同様のテーマは、パークスらに続く世代の劇作家として頭角を現しているブランデン・ジェイコブズ＝ジェンキンスの『アプロプリエイト』(2013)でも描かれるが、この作品では「遺産」をめぐる軋轢を深めるのはアーカンソー州の3人の白人姉弟たちである。本発表では、とくに『アプロプリエイト』に焦点を当てながら、奴隷制の負の遺産という観点からアメリカ演劇で度々描かれる兄弟姉妹の関係性を再検証してみたい。

アメリカ演劇の「きょうだい」たちが追い求める幸福について

黒田絵美子

Tennessee Williams の *A Streetcar Named Desire* における Blanche と Stella 姉妹の間には、美や洗練された会話に拘る姉と、家を捨てなりふり構わず愛する男と駆け落ちした妹という対立構造がある。タイトルにある「欲望」という文言は、高校教師という職を解かれ、町を追われた Blanche の代名詞であるかのように受け止められてきたが、一方で彼女は長女として、両親の死を見送る務めを果たし、先祖の残した借金の後始末もした。亡き恋人 Alan から送られた詩とともに多くの借用書が箱に収められていたことが、長女としての Blanche の半生を象徴している。本発表では、南部の屋敷の長女としての Blanche と次女 Stella との生きざまの違いを精査することを通して、それぞれが追究した幸福とは何であったかを分析する。他にも、*Beyond the Horizon* の Robert や *Death of a Salesman* の Biff の抱く人生への夢なども参照しつつ、アメリカ演劇の名作に登場する「きょうだい」たちを通して、アメリカ社会が求める幸福とは何かを分析する。

<シンポジウム 3：英語学・英語教育部門> 6 階 604 教室

(司会・講師) 法政大学准教授 柳川浩三

(講師) 秋田大学准教授 濱田陽

(講師) 青山学院大学准教授 米山明日香

英語リスニングの理論と実践

本シンポジウムの目的は、第2言語(L2)としてのリスニング理論とリスニング指導実践を参加者と共有し、教室でのリスニングの指導に具体的な示唆を提示することである。

英語の授業では今も昔も、リスニングが4技能の中では最も軽視されていると言っている。一体、何をどのように教えたならリスニングを教えたことになるのか。そして、そうして教わった学習者の英語リスニング力はホントに伸びるのか。これらの問いに英語音声学、シャドーイング、リスニング測定の専門家の知見をシンクロさせる。

リスニングとテスト

柳川浩三

日本の英語教育の文脈では、リスニング指導はリスニングテスト指導と関連づけることが実効性が高い。なぜなら、多くの学習者が影響力の大きいテスト(high-stakes test) 一大学生ならばTOEIC L & R、高校生ならば共通テストリスニング試験で高得点をとることが英語リスニング学習の直近の目標になっていることが少なくないからである。そこで、本発表では、実際にTOEIC 準備コースに在籍した大学生約60名を対象に、ボトムアップ方式と方略(メタ認知)指導とで、どちらの指導方法が熟達度に応じて有効であるかを調べた知見を参加者と共有し、指導の有効性を考察する。加えて、令和2年度から新たに導入された「大学入試共通テストリスニング試験」の学習者への波及効果を、高校生へのアンケート結果を基に論じる。

リスニングとシャドーイング

濱田陽

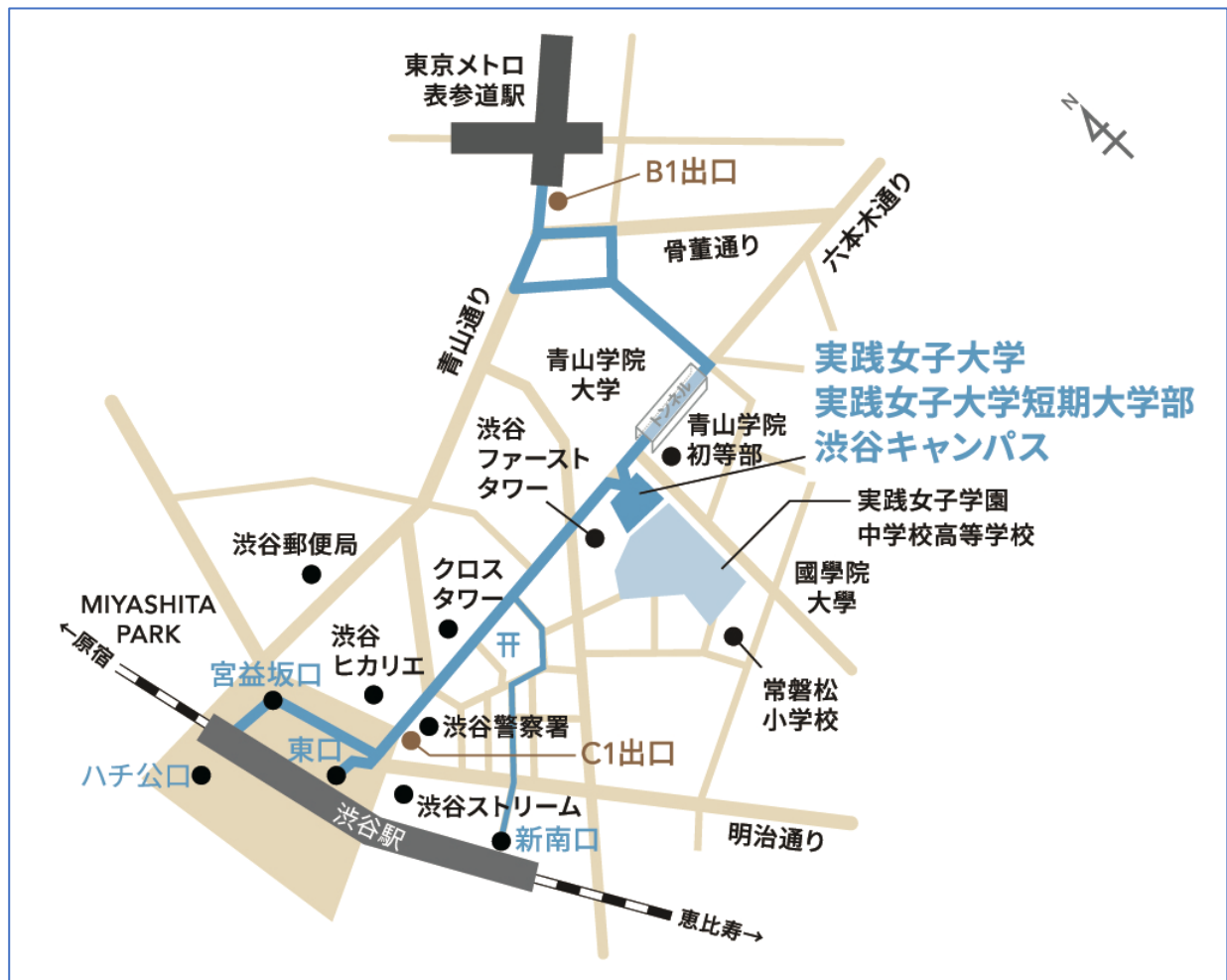
学校英語教育においては、コミュニケーションを図る力の育成が求められている。コミュニケーションをする上で避けては通れないのが聞くこと(リスニング)である。言語構造が英語と全く異なる日本語を第一言語とする学習者にとって、英語の音声・単語の聞き取り(リスニングにおけるボトムアップ処理)は教師の想像以上に難しいものである。そこで、本シンポジウムでは、初めに、日本人英語学習者は具体的にどのような単語が聞き取れないかをデータで示す。そして、その改善策としての、シャドーイングの重要性について、その基礎理論・実証的データ・実践方法を交えて紹介する。

リスニングと音声:ラジオ番組での応用

米山明日香

リスニング指導において重要なことは（１）（音声知識を含む）英語的知識、（２）背景的知識、（３）文化的知識をバランスよく指導することである。それによって、はじめてテキストへの深い内容理解につながるからである。本シンポジウムでは NHK ラジオ講座「ニュースで学ぶ『現代英語』」で使用了素材などを使用しながら、どのような点に注意して音声指導を行えば効果的なリスニングにつながるか、個々の音や音変化といった音声的特徴を捉えながら説明する。加えて、深い内容理解のためには背景的知識や文化的知識が欠かせないが、それがどのようにリスニングの際の理解につながるのか、例をあげながら説明する。

会場アクセスマップ



アクセス方法

渋谷駅からお越しの場合

JR 線・東京メトロ(銀座線・半蔵門線・副都心線)・東急(東横線・田園都市線)・京王井の頭線
東口 C1 出口から徒歩約 10 分

表参道駅からお越しの場合

東京メトロ(銀座線・半蔵門線・千代田線)
B1 出口から徒歩約 12 分

懇親会について

今大会では、懇親会の開催はございません。